
すべては神の仰せのままに

ふじたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべては神の仰せのままに

【Nコード】

N6605A

【作者名】

ふじたま

【あらすじ】

平凡ながらも楽しい人生を送っていた女子高生の『叶』。ある日彼女のもとに突然見知らぬ男が現れる。男は自分を『運命執行人』と名乗りにつこり笑って言った。「貴方の運命修正に来ました」と…。

プロローグ（前書き）

初めて書くのに連載しようとしてる無謀な作者だったりします。

拙い文な上 誤字・脱字等あるかもしれませんが 精一杯頑張りますので お付き合い頂けると嬉しいです

（、＊）

プロローグ

運命

それは この世に生きるすべてのモノが 産み落された瞬間から背
負わされた定め

運命

それは 抗う事の出来ぬ 神の定めたシナリオ…

運命

それは 忠実に実行されなければならない…

すべては神の仰せのままに

プロローグ（後書き）

読んで頂きありがとうございます

三日に一回は更新出来る様に頑張りますのでよろしくお願いします
第一話は今日中に更新予定です

第一話 運命なんて信じない(前書き)

なんか 文章めちゃくちゃな気が…

先に謝っておきます

すいませんm(_ _)m

第一話 運命なんて信じない

「のおおー!!」

とある街のとある郊外…。

小鳥囀る爽やかな朝の空気の中に 少女の叫びがこだまする…。

そう この朝っぱらから大声で奇声をあげている少女こそ この物語の主人公。 すなわちヒロインってやつだったりする…

「叶^{かなえ}！朝っぱらから 何叫んでんのっ！起きたなら早くご飯食べちやいなさいっ！」

少女に負けない大声で階段下から叫んだのは 少女の母である ちなみに 「叶」というのが少女の名前…。

しかし階下で叫ぶ母の声も耳に入らないのか 少女：叶は青い顔をしながら呆然と机の上に散乱した教科書を眺め呟いた。

「どうしよう…」

叶の記憶が昨日に遡る。昨夜は期末試験の勉強をしようとして机に向かった所 30分ぐらいで強烈な眠気に襲われたので 少し仮眠を取ろうと一時間後に目覚ましをかけて寝た所までは覚えている。

…が、気付いたら朝の小鳥の囀りで目を覚ましたのだった。

「目覚ましかけたのに…」

無意識のうちに3つ仕掛けてあった目覚ましをすべて止めてまた眠りについたらしい

最悪なことに 叶は一夜漬勉強派なので今まで全く勉強していなかった。

今日のテストの『歴史』も『物理』もテスト範囲の三分の一しか頭に入っていなかったのである。

まあ 自業自得というやつである。

結局 朝御飯もろくに食べないまま 叶はトボトボと学校に向かった

「カナ」。テストどうだった？」

「聞かないで……」

テストが終わった喜びに弾んだ声で 声をかけてきた友人とは反対に 叶は暗い声で答えた。

「私はそこそこ出来たよん」

またしても 弾んだ声で言ったのは 先程も登場した叶の友人
鈴木 明日香』である

「そつかあゝ良かったね」

言葉とは裏腹に叶は 明日香のほつぺたをつねりながら引きつった
笑顔をみせた。

「いひゃいっれば」

明日香は やつと開放されたほつぺたを擦りながら続けた

「カナ機嫌悪いね。どしたん？」

どうしたもこうしたも…

人が出来なかったテストが出来たって アンタが喜んでるからだろ
がっ！と心の中でツツコミをいれつつ

「昨日勉強しないで寝ちゃってさあゝ
テストさっぱりだったし、ほとんど勘で答えうめたし。後は神様に
頼るしか…」

と言うと 自分の胸の前で手を合わせ祈るポーズをした

「アハハ んじゃ あたしも 祈ってあげるゝ カナのヤマ感が
当たってますよゝにっ」

明日香も ふざけて手を合わせる

普段 神様など信じていない叶だが こういう都合のいい事だけ
神様に頼るのである。

叶は 神様も運命論も占いも信じていなかった。
自分の人生がすでに決まっているなどありえないと思っている。
人生は自分で切り開くものだ。というのが彼女の持論であり信条で
あるのだ。

そして叶は 自分の力で夢を叶えられますように… との願いを込
めて両親が付けてくれた名前を気に入っていた

人生は自分で切り開く…

そんな 叶の持論を覆してしまう出会いがこのすぐ先に待っている

事を彼女はまだ知らなかった

第二話 ストーカーってやつですか？（前書き）

作者 無宗派なんです。キリスト教徒の方や仏教徒の方 読んで気
分害したらごめんなさい

m ((m

第二話 ストーカーってやつですか？

「神様のバツカヤロ〜！」

学校からの帰り道 夕日に向かって叫んでる一人の少女… 叶である。

本当によく叫ぶ少女だ…。

きつと 一話に一回は叫ぶ事だろう…（作者暴走気味

何故叫んでいるかというと 先日行われた歴史のテストが本日返却されたからだった。

結果は見事ギリギリ赤点。

29点だったのだ。

まあ 点数が悪かったのは 答えが分からず勘に頼った叶のせいなのだが…。

「後 一点だったのに…」

叶の学校は 30点以下が赤点となり 赤点を取った生徒は夏休みに 補習と追試を受けなければならない。今の彼女は とにかく何かに このムシャクシャした気持ちをぶつきたいのだった。

まあ 要するに八つ当たりである。

「せっかくテスト出来てます様についてお願いしたのに…。神様の意地悪〜。」

神頼みで テストで良い点取れるなら 誰だって勉強せずに祈るだ

ろっ…。と誰もがツツコミたくなる事を言っていた。

「神様の…」

「神を馬鹿にするとは 聞き捨てなりませんね…」

「ん？」誰かの声が聞こえた気がして 辺りを見回す叶。
しかし 周りには誰も居ない。

「なあんだ空耳かあ。」

叶が一人納得して再び歩こうとすると…

「空耳じゃありませんて。ここですよここ。」
と 頭上から声が聞こえた。

「ここって何処よっ！……なっ???!」

??????

どうやら目の前に叶の 理解能力を超えた事が起きたらしい。
叶の頭は一気に真っ白になった。

何か 言おうとしているが 声にならず口をパクパクさせている。

叶が この様な状態になるのも無理はなかった。

彼女が振り返って見上げた先には 一人の青年が浮かんでいた。

そう ぼっかりと宙に浮いていたのである。

「そつかあ。きつとマジックだ。うん。そうに違いない」

終いには 独りでぶつぶつ言い出した。

「あのお 別にマジックって訳では…聞いてます？」叶が 独りの

世界に浸ってしまつて 相手にされない青年は困り果て す-ton
という音とともに地上に降り立ち 叶の顔を覗き込む。

「藤崎叶さん…？」

バツという音が聞こえる程の勢いで 叶がいきなり顔を上げた。

「なっなんであたしの名前っ?!」

「貴方の事ならなんでも知ってますよ。」

慌てる叶を余所に 青年は平然と続ける。

「藤崎叶。 17歳。 1889年生まれ。 B型。 身長163cm。 体重52kg。 趣味は音楽観賞。 将来の夢は保育士。 …後は」

「もしやストーカーってやつですか？」

怪訝な目をして青年を見つめる叶。

青年は慌てて否定した。

「ちっ違います。 自分はそんな怪しい者では…」

「充分怪しいんですけど…」

じいゝと見つめる叶の視線を遮るかの様に 両手を顔の前にかざした青年は 苦笑混じりに自己紹介する。

「僕は運命執行人をしていますカイと言います。 貴方の運命の修正に来ました。」

言い終えると カイと名乗った青年は ほのぼのとした顔でにっこりと微笑んだ。

第二話 ストーカーってやつですか？（後書き）

こんな駄文ですが読んで頂きありがとうございます。
最初ですので更新早かったです。

この調子でいけるといいなと思う今日この頃…
これからもお付き合い頂けると嬉しいです

第三話 謎の青年いえに現る（前書き）

誤字・脱字や読みにくいところあつたらごめんなさい

第三話 謎の青年いえに現る

「は？」

叶の頭の中は 真っ白を通り越して透明になりかけた。

運命執行人って何？

なんかの宗教？

ってかこの人 ヤバくない？絶対ヤバいつて…。

そして 叶の頭が弾き出した答えは…。

『とにかく逃げとけ』だった。

「あの…間に合ってますから〜！」

そう言うと 未だににこにこ笑っていた 先程カイと名乗った青年の脇をすり抜けて 一目散に駆けていった。

「はあ…一体何だったんだろ…」

謎の宗教勧誘青年から逃げ出した叶は 家に帰ってくるなり バタツとベットに倒れこんだ。

久しぶりの全力疾走からか 心地よい疲労感が襲い叶はいつの間にか眠りに落ちていた。

「…さん」

…ん？

「…なえさん」

何よ人が気持ち良く寝てるのに…

叶は心で悪態つきながらも重い瞼をあけた。

「あつ！やつと起きてくれましたね。おはようございます叶さん」

目の前にはにっこり微笑む青年。

叶は自分の置かれた状況を把握できずに目がテンになった。

「まあおはようと言ってもまだ夜ですが…」

と 言いながらちよつと困った様に笑う青年。

良く見ると結構整った顔付きをしている。

笑顔の似合う優しいお兄さんといった感じの人だった。

ん？ちよつと待て…

この人どっかで…

必死に まだ半分寝ている頭を使い思いだそうとする叶。

少し考えると 昼間出会った謎の青年と今自分の目の前ににっこり微笑む青年の顔が重なる。

「あつ貴方昼間の…。ってかなんで此所につ?!不法侵入っ?!きやー!おかあさ……も」

「ちよつちよつと待って下さい。」

慌てた様子の青年が叫ぼうとした叶の口を手で塞ぐ。

「だから自分は怪しい者ではありませんて…」

青年に口を塞がれたままもがく叶。

ひよろつとしている割には青年の力は強く叶の力ではびくともしない。

それでも手足をばたつかせて必死に手を振りほごうとする。

「だって手を離したら叶さん叫ぶでしょ…。まあ叫んで誰か来たところで僕の姿は他の人には見えませんから問題はありませんが…。でも近所迷惑になりますし…」

叶の声は馬鹿デカく、あの声で叫ばれたら近所の人達が何事かと集まりかねない。

「今手を離しますけど騒がないで下さいね…」

このままでは 身動きが取れない。
仕方なく叶はコクンと頷く。

「良かった。やっと話が出る。」

青年はホッと安堵の溜め息をつく。 叶の口を塞いだ手を離れた。

「ってかアンタ誰っ？一体何なの？どうやって家に入ったの？」

やっと自由になり話せる状態になった叶はすごい勢いで青年に捲し立てる。

「あれ？酷いなあ。昼間会った時に、ちゃんと自己紹介したのに…もう忘れちゃいました？」

興奮気味の叶とは反対に青年は呑気な声で答える。

「僕の名前はカイ。運命執行人だっって言っただじゃないですか…。それとここにはそこから入って来ました。」

そう言っただけでカイは 叶の部屋の窓を指指した。

叶の部屋は2階でしかも屋根伝いに登って来れる様な造りではなかった。

「ああ。そっぴやアンタ、空飛べるんだっけ？…で？運命執行人ってのは何？言っとくけど変な宗教だったらお断りよ。」

普通の状態なら 人が空を飛ぶという非現実的な事をすんなり受け入れる事は出来なかっただろう。

しかし 今の叶の頭の中はパニックっていてそれどころでは無かった。いや ただこの事について深く考えたく無かっただけかもしれない。

「運命執行人っていうのは、まあ簡単に説明すると…生物が生まれ

持った運命さだめをそのシナリオ通りに遂行させる人って事です。あ…因みに僕は人だったので人担当の執行人をしますけど、猫には猫の担当者。鳥には鳥の担当者がつくんですよ。」

にこやかに語るカイ。とは反対に…

「何処が簡単なのよっ！さっぱり意味が分かんない！」

叶の叫びがこだました。

第三話 謎の青年いえに現る（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

まだまだ未熟者ですが精一杯頑張りますのでお付き合いの程よろしくお願いします

第四話 天会のしくみ（前書き）

天会について 作者も頭の中の事を文にするのに苦労しました。
分かりずらかったらごめんなさい。

第四話 天会のしくみ

「…ですから、天会というのは…」

もう 三度目となる同じ説明をカイは丁寧に繰り返す。

ここでカイがした説明を掻い摘まんで説明しておこう。

まずカイの言う『天会』とは、

「天上界神業務補助会」

の略で、その『天会』では普段忙しい神の仕事をサポート…というのは名目で実際は天会の方々（人以外の生物含む）が分担して神様の仕事を行うという所らしい。

まあこつちの世界でいう役所の様な所だそうだ。因みにカイが所属している部署は『地球部人間課運命執行係』でカイは日本の地区担当をしているとの事だった。

そして その運命執行係では『運命シナリオ係』が個々の生物の生誕時に定めた運命がきちんとシナリオ通りに遂行されているかを見守るのが仕事らしい。

叶が無い脳味噌を総動員してカイの話をなんとか理解纏めた結果はつまり…

叶がこの世に生まれた時には『運命シナリオ係』なるところで 叶の運命が決められていて、カイの仕事である『運命執行人』が叶の

人生が定められた運命通りに進んでいるか見守っている。
…という事だった。

「他にも天会には『魂お迎え係』や『神頼み聞き入れ係』なんてのも…。…ん？あれ？叶さん？」

「……………」

「あの？叶さん？」

カイは聞いてます？と言いながら叶の顔の前で開いた手をひらひらと振る。

依然黙り込んだまま下を向き 手をワナワナと震わせている叶。

「あの…。どうかしました？」

「…じゃないわよ。」

「え？」

「冗談じゃないわよー！！」

突然 拳を握りしめながら叶が叫ぶ。

「私は神様も運命も信じてないのっ！それをいきなりそんな事いわれても… もうなんなのよぉー」

叶は自分が今まで全く信じていなかった突拍子もない話を聞かされ

パニックのあまり泣き出していた。

それもその筈 叶は自分の人生は自分の意志で生きていくものだと思っていたのだ。

現に彼女は今までその様に生きて来たつもりだった。

しかし カイの話を聞いていると自分が只の人生ゲームの駒になっただけの様な気分になったのだった。

神の振ったサイコロによって 用意された人生を進んでいく只の駒。そこには駒の意志も感情も何もなくてただ進まされていく。

「私は人生ゲームの駒なんかじゃない。」

叶が呟いた言葉で カイは叶の心情を察したらしくゆっくりと口を開いた。

「でも、この人生ゲームの駒には意志があります。進む方向も速度も駒次第です。」

「…ど…いう事？」

「確かに 生物は生まれた時に定められた運命通りに人生を過ごし終える事となりますが 運命シナリオにはいくつかの分岐点があります。どの道を選択するかは本人次第ですし…」

それに… 叶の様子を少し心配そうに伺いながらカイは続ける。

「自分の夢や希望を実現出来るかは自分の努力次第です。運命で決められているからといって努力を怠る者に自分の夢を叶える事はできません。」

「でも…」

まだ納得いかない感じの叶に カイは優しい声で尋ねた。

「叶さんは 今の話を聞いて自分の夢を諦めようと思いました？」

「…え？」

「あらかじめ決められた運命通りに生きるのは嫌なんでしょう？」

「確かにそうだけど…」

下を向いていた顔を上げ叶は続ける。

「でも 私は夢を叶えたい。保育士になるのは私の夢だから…。」
小さい頃 母は仕事が忙しくあまり構ってもらえなかった。

そんな叶に微笑みかけ 話を聞いてくれ 叶の淋しさを取り除いてくれた保育園の先生。

あの笑顔に憧れ 叶は小さい頃から保育士になりたいと思っていた。

「それでいいんです。」

にっこりと微笑むカイ。

「あまり自分の運命に囚われるべきではありません。あまり気にし

ないのが一番です。」

「そうだね…。…ん？でも…」

カイの言葉を聞き少し落ち着きを取り戻した叶は ふと何かに気付いた。

「そもそもアンタがあたしの前に現れてこんな話しなければ運命についてなんかで悩んだりしなかったんじゃない…。」

「うっ」

たじろぐカイ。

「大体天会の人間だとか言っちゃってるけど証拠はあるわけ？大体何しに私の前に現れたのよ！」

さっきまで泣いていたとは思えない叶の剣幕に圧倒され 苦笑いするカイ。

「叶！あんた何さっきから夜に一人で騒いでんのっ？！静かになさいっ」

結局 今日も叫ぶ主人公。

カイはこの後叶が納得するまで約3時間延々と説明を続けるハメに

なる。

第四話 天会のしくみ（後書き）

書きたい事がうまく表現出来ない自分が悲しい今日この頃。
ああもつと文才が欲しい…。

読んでいただきありがとうございます。
引き続き頑張りますのでよろしくです。

第五話 寝不足の原因（前書き）

寝ぼけて書いてるので 誤字あるかもしれないです。
叶とカイって微妙にSM？（笑

第五話 寝不足の原因

「眠い…」

ふあゝっと大欠伸しながら叶は電車に乗り込んだ。

7月の茹る様な暑さの中エアコンのきいた電車の車内は幾分か涼しく、叶は寝不足の体をドアに預け心地よさそうに目を瞑る。

「おつはよおゝ カナ」

「朝から元気だねえ…」

朝っぱらからハイテンションで声をかけて来た明日香に対し叶はमतもや大欠伸をする。

「おはようっ！」

「うう。分かったってば…、おはよう。」

叶がおはようと言うまで、しつこく朝の挨拶をしてくる明日香に苦笑いしながら返事を返した。

「どしたの？カナ。寝不足？」

「うん…。ちよつとね。」

まさか 運命執行人とかいう怪しいヤツとずっと話込んでほとんど寝てないなんて言ってもなあ。

寝ぼけてんのかと笑われるだろうと思い 叶は適当に返事をした。

まあ 明日香の場合 きちんと話せば信じてくれるかもしれないが…。

説明すんのも めんどいしなあ…。

叶は 面倒な事は嫌いだった。

しかし 自分の興味のある事に対しては普段ではありえない程の集中力と根気強さを発揮するというB型らしいところもあったりする。

「あつ！ もしかして夜遅くまで追試の勉強してたの？ 頑張るね」

「追試…」

寝不足の上に 嫌な事を思い出し更に憂鬱な気分になる。

家帰って寝たい…。

叶の気分とは関係なしに電車は進み足取り重く学校へ向かうのだった。

「おはよう藤崎。なんだ？ 朝から元気ねえなあ。」

教室に入ると叶は背後から声をかけられた。

「うわっ!？」

「んあ?どうかしたか？」

「うっん。いやなんでもない…。なんでもない。お…おはよう春日」

叶は慌てて返事をした後 叶は目の前の人物 春日^{かすが} 竜哉^{たつや}をじっと見つめた。

コイツがねえ…。

叶は昨日のカイとの話を思いだした。

話は昨日の夜に遡る。

「そもそもアンター一体何しにここに来たのよっ？」

「アンタって… 僕にはカイと言う名前が…」

「じゃあ…カイ。一体何しに来たの？」

「うう…いきなり呼び捨てですか…？」

カイは 見た目20代前半くらい。
明らかに叶より年上だった。

「いきなり不法侵入してくる様なヤツを敬う気はないもん。よって
タメ口呼び捨て」

「はははは…。まあ なんでもいいんですけどねえ…。」

渴いた笑いの後　心なしかうなだれながら　カイが続ける。

「だから　初めて会った時に言ったじゃないですか。僕は叶さんの運命を修正しに来たって…。」

「それが分かんないって言ってんのっ。もっと分かり易く説明してよ。」

腰に手を当て　カイを指差しながら詰め寄る叶。
迫力に押され　たじろぎながら一歩下がるカイ。状況から見て力関係は歴然だった。

「うーん　あんまり本人に運命を話すのは良くないんですが…。まあこの場合叶さんの協力を得ないと修正は出来ませんし…。仕方ありませんね…。」

落ち着いて聞いて下さいね。

…と念を押しカイは口を開いた。

「叶さんは、春日竜哉と言う少年と恋に落ち結婚する運命となっているのですが…」

「はあああ…？」

思わず大きな声をあげる叶。

カイが慌てて　また口を塞いだ。

「だから落ち着いて聞いてくれっていったじゃないですか…。」

「ふおれん。（ごめん）」

口を塞がれたまま葉が謝ったのでカイは手を離し葉の口を開放した。

「春日竜哉って…あの…だよね？」

葉の頭に あるクラスメイトの顔が浮かぶ。

2年になって初めて同じクラスになった竜哉とは 挨拶を交わしたり世間話をする程度の仲でしかなかった筈だ。

「そうです。あの…です。叶さんと同じクラスに居る筈なんですけど…。」

「確かに居るけど…。春日と私が結婚っ？！まさかあ…。」

「そのまさかなんですって、運命のシナリオでは叶さんは2年のクラス替えて出会った春日君に一目惚れをし、叶さんの一年の片思い後に二人は交際する事になり、4年後二人は結婚…という事に…。」

「ちょっと待ってっ！？クラス替えの時って4月でしょ…。私別に春日に一目惚れなんてしてないんだけど…。ってか春日の事は単なるクラスメイトとしか思っていないし…。」

「そこなんですよ。運命通りなら、今頃叶さんは春日君を好きになつてる筈なんです。ですがその気配すらない。このままでは叶さんだけでなく二人の周りの人の運命にまで影響が出てしまう事になりかねません。ですから僕が修正に…。」

ん？ちよつと…待つて。
つて事は…

「ん」と。そうするとカイの仕事っていうのは…」

「叶さんが春日君を好きになる様仕向ける事です。」

キラキラと効果音が付きそうな程　にっこりスマイルで言うカイ。

くう　ま…眩しい…。

いかん見とれてる場合じゃない。

「冗談じゃないわよっ！運命で決まってるから好きになれ？…なにそれっ！？勝手過ぎるっ！」

「そう言われましてもこれが僕の仕事ですし…。」

「大体　運命で決まってるならなんで私は春日を好きにならなかったのよ？」

「いや、どついう訳か手違いが起きたようで…。」

困り果てるカイ。

そんな事はお構いなしに叶は　カイを怒鳴り付ける。

「運命だから好きになれなんて無理っ！絶対嫌！諦めて天会に帰つてよっ」

「僕はこの仕事が終わるまで天会には帰れないんです…。」

シヨボンとうなだれるカイ。

「そもそも運命執行人って何なのよっ？そんなの信じろってのがおかしいっのっ」

「そう言われましても…信じて貰うしか…」

「じゃあ証拠見せなさいよ。証拠。」

うーん。しばらく考え込むとカイは

「仕方ありませんね。」

と言ってゴソゴソと懷から手帳らしきものを取り出す。

「んと、じゃあ…。ちよつと窓の外見て貰えますか？」

言われて 叶は窓の外を見る。

窓の外は 人通りの少ない路地に街頭がぽつんとあるだけだ。

「なんも無いけど…」

「まあちよつと見て下さい。」

「しばらくすると背広姿の中年男性が歩いてくる筈です。

「只野正一」

45歳。彼は前の家に空き巣に入ろうとしたところ、番犬にお尻を噛まれ通報され捕まります。」

「は？」

なにそれ？…と言おうとした叶の視界に背広を着た男性が映った。男はきよろきよろした後、人が居ないのを確かめて向いの家の塀によじ登った。しばらくして…ワンワンという犬の泣き声とともに男の悲鳴が聞こえ、10分後にはパトカーのサイレンが響いてきた。

「ほらね。信じてもらえました？」

微笑むカイ。

叶はまだ納得いかない様子だったが、翌日の新聞の端に『お手柄番犬！お尻パクで泥棒御用』という見出しと『只野正一』の名前を見つける事になるのだった。

「まあ一応信じてあげるわ…」

叶の言葉に、ほっとした表情をみせたカイは

「良かった。ではこれからよろしくお願いします。」

と、言いぺこりと頭を下げた。

「もしかしてずっと私の側に居る気なのっ?！」

「駄目ですか?」

泣きそうな目で 叶の顔を見つめるカイ。

なによぉ なんか私が悪者みたいじゃない…。

「なんでアンタと一緒に居なきゃなんないのよっ」

「普段は迷惑にならない様に影でひっそりしてますから…この仕事終わないと天会に戻れないんです…。お願いします」

とうとう土下座まではじめた。

「うっ 分かったから そんな捨てられた子犬みたいな顔して見上げないでよ」

とうとう 叶が折れた。というか この場合折れるしか無かった。まあ断ったところで カイは結局無理やりでも叶の側にいただろうが…。

こうして 叶とカイの妙な同居生活が始まったのだった。

「ところで僕はどこで寝れば…?」

「ちよっと一緒に寝る気なのっ?!…ん?…ってか天会の人寝たりするの?」

「当たり前です。寝ないと疲れちゃうじゃないですか。まあ食事は取らなくても平気なんですけどね…。…で、僕は何処に寝れば…？」

「…床」

「そんなあゝ（；|；）」

こうして 長い夜は明けていったのであった。

第五話 寝不足の原因（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
これからよろしくお願いします

第6話 いきなり現れ禁止令（前書き）

すみません

更新だいぶ遅れました…

m (| |) m

待ってくれてる方も居ないかもしれないですが…（泣

第6話 いきなり現れ禁止令

「…崎？おゝい…藤崎いゝ 帰って来ゝい…」

叶が気がつく顔の前で 手を左右に振る竜哉がいた。
どうやら昨夜の回想をしながら 教室の入口にボーッと突っ立って
いたらしい。

「んっ？！えっ？ああ…ごめん春日。なんでもないから…」

「なんでも無いって…、ほんと平気なのかよ？どつか具合でも悪い
のか？」

そういうと 竜哉は叶の顔を心配そうに覗き込んできた。

「ほっほんと大丈夫だから…」

慌てて取り繕う叶を助けるかの様にチャイムが鳴り 叶はいそいそ
と自分の席に向かう。

もう… カイが昨日あんな事言うから 変に意識しちゃうじゃない
…。

叶は 少し赤らんでいる自分の顔を押さえながら カイにぶつくと文句を言った。

「でも、意識するって事は叶さんが竜哉君を好きになる可能性もあるって事ですよね？」

「っ?!」

急に声が聞こえたので叶が慌てて辺りを見回すと 窓際にある叶の席の隣の窓の外から お馴染みのにっこりスマイルでひらひらと手を振るカイの姿。

3階にある叶の教室にはベランダも無く カイはふわふわと宙に浮かんでいる。

「...。」

いきなり現れたカイに驚きて口をパクパクさせる叶。
いきなり3階の窓の外から声をかけられれば驚くのも無理はない。

叶以外には カイの姿は見えず声も聞こえないので 騒ぎにはならないのは幸いだった。

「どうかしました?」

相変わらずにこにこしながらそう聞いてくるカイに対し...今まで黙

つていた叶が口を開く。

「何がどうした？よっ！？いきなりそんな所から現れて話かけてくるんじゃないわよ！」

叶は声を荒げて怒鳴った。

「そりゃ悪かったな……」

……ん？

教室の前の方から 聞き慣れた声が聞こえ、叶は恐る恐る前を見る。

すると いつの間にか教室に入ってきた叶の担任である上原が眉間に皺を寄せながら叶を睨んでいた。

どうやら 担任の上原は窓の外を見たまま固まっていた叶を心配して「どうかしたのか？」

と声をかけていたらしい。

そこへタイミングよく 叶がカイに対して怒鳴ってしまったのだった。

「あははははは……。すつすいませんでしたあ。」

慌てて席を立って頭を下げる叶。

「朝から寝ばけてんじゃないぞ…。夢なら布団の中で見る。」

上原が 叶の事を注意すると ドツとクラスから笑い声があがった。

「ちょっとカイツ！居るんでしょっ？！出て来なさいよっ！」

「よ…呼びました？」

苦笑いを浮かべながらビクビクとカイは姿を現す。

「カイの馬鹿！あんたのせいで先生に怒られたじゃない。」

「そ…そんなに怒鳴らなくても…」

まあまあ…と叶を宥めようとするカイだったが逆効果の様だ。

ここは 学校の屋上。立ち入り禁止の場所である為 お昼休みの今でも 叶の他に生徒は居ない。

「大体人前で話かけるの禁止っていったでしょ。姿の见えないアンタと会話してたらアタシが怪しい人みたいじゃないっ」

「すみません…つい、うつかり…」

人気の無い屋上に叶の怒鳴り散らす声が響き、カイは苦笑いしながら謝る。

「いゝい？今後一切人前で話かけないでっ。あと、いきなり現れるのも禁止っ！」

ビシッと言い放つ叶の勢いに押されて後ずさるカイ。

「はい…。以後気をつけます。」

ここで逆らったら また天会に帰れとどやされかねないと カイはとりあえず謝まり続ける。

「分かったなら今回は大目に見てあげる。次はないからねっ！」

ビシッと言い放つ叶に平謝りなカイ。

叶のお説教が効いたのか この日はこれ以降カイが姿を見せる事は無いまま放課後になった。

「あゝもうっ プリントの量あり過ぎ…」

今朝の一件で罰として担任に授業で使うプリントを綴じる作業を手伝わされるハメになってしまった叶は 放課後の教室で一人 ホチキス片手にパチパチとプリントを挟んでいく。
折っては綴じるといふ単調作業にすでに飽きてきていた叶は 残りのプリントの山を見て溜め息をついた。

友達に手伝って貰おうと頼もうとした所 担任に見つかり 罰なんだから一人でやる様にと念を押されてしまい 叶は一人でこのプリントの山を片付けなければならなくなってしまったのだった。

「ちよつと… ねえカイ… 居るよね？」

「…」

叶が呼んでも 常に側に居るハズのカイからの応答が無い

「居るのは分かってるんだからねっ！ さっさと出て来なさいよっ」

「ふう… 都合のいい時だけ呼び出さないで下さいよ」

やれやれといった感じでカイはぶつくさ言いながらも姿を現した。

「その様子じゃやる事は分かってるわよね」

「わ… 分かりかねますが…」

「手伝って」

「…やっぱりですか」

苦笑するカイ。

「もとはといえばアンタが原因なんだから…当たり前よね」

「うう…分かりましたって…。ただしプリントに触れなければならぬという事は実体にならなければなりませんし…。」

「だから何？やるの？やらないの？」

カイの煮え切らない態度にちょっとイラついてきた叶。
手伝わぬという選択肢は既にカイには無い様だ。

「ですから…。実体になると僕の体が他の人からも見える様になつてしまいますが、部外者が学校に居ても大丈夫ですか？」

「うん。もう結構時間も遅いし大丈夫でしょ。誰にも見つからな
いって…。さつさと実体とやらになって手伝つてよ」

アンタが見つかって不審者扱いされてもアタシには関係ないし…。
とまでは流石に言葉にはしなかったが…。叶にはカイがどうなる
うが知ったこっちゃないらしい。

…その時

ガラッと 突然教室のドアが開いた。

「誰っ?!」

突然の音にびつくりした叶は勢いよくドアの方へ振り向く。

「うおっ！そんなに驚くなっで…」

見るとドアの所には竜哉が立っていた。

第6話 いきなり現れ禁止令（後書き）

読んで頂きありがとうございます

引き続き頑張りますのでよろしく願いします

第七話 友達に昇格（前書き）

最近 カイのキャラが分からなく…
イメージ的にはぽやっとしたお兄さんなんですが…

第七話 友達に昇格

「俺の顔になんかついてる？」

教室の入口に立ったままの竜哉は自分へと向けられる視線に耐え兼ね頭をかいた。

ジャージ姿な所を見ると部活動をしていた様だ。

「うっ うっん。なんでもないよ。春日がいきなり入って来たからびっくりしただけ…」

「そっか…驚かせちまって悪かったな。ちょっと忘れ物しちまってさ…。……ところで。」

そこまで言つと 竜哉は叶の方を見つめる。

「何っ?!」

急に見つめられて 叶はドキッとしたのだが、よく見ると竜哉の視線は叶の隣に向けられていた。

「その人誰？」

「!？」

叶がバツと横に向くと、そこにはいつもの 白のシャツにジーンズ

姿のカイ。

「…もしかして？」

カイだけに聞こえる様に小声で尋ねる。

「はい…。そのもしかしてです。実体になっちゃいました。」

頬をポリポリと掻きながら苦笑いするカイ。

アンタってヤツはなんでそうタイミングが悪いのよー！

肩をワナワナと震わせて心の中で叫ぶ叶だが今はそれ所では無い。
カイが竜哉に見つかりと色々面倒だと判断した叶は

「あっ！春日見てっ！」

そう大声を上げ窓の外を指差しながらも急いでカイの方へ振り向き

「消・え・ろ」

…と口パクで合図する。

合図を受けカイはそそくさと姿を消した。

「なんだよ…何もねえじゃん。」

叶の言葉に素直に窓の外を見つめていた 竜哉だったが、

特に何も見付からず 抗議の声をあげた。

「あれ〜？おかしいな… 向こうの校舎で校長と教頭が抱き合ってた様に見えたのに…。」

因みに 校長も教頭も男である。

それもかなりいい年した中年のオジサンだ。

「うげ… 変なモン見せようとしてんじゃねえよ…。」

という春日の言葉に

私もそんなの見たくないよ…

と思った叶だったが ポンツとリアルにその情景が頭に浮かんでしまい 思わず顔を引きつらせた。

「…んっ？！あれっ？さっきお前の隣に男の人居なかったか…？」

叶と同じ様に 校長と教頭のラブシーンを想像して青ざめていた竜哉だったが 突然思い出した様に 叶に尋ねてきた。

「やだあ。春日ったら夢でも見たんじゃない？教室にはずっとアタシ一人だったよ…。」

「ほんとか？マジでっ？あれ…おかしいな…。んじゃあ俺が見たのはなんだったんだ？幻か…？」

「うん。多分そうだよ…。幻覚見るなんて春日きつと疲れてるんだよ。早く帰った方がいいって…。」

「そうなのかな…。」

言いながら、ふと竜哉は叶の方を見る。

「ん？それって上原に頼まれたプリントか？」

「うん。そう。これ終わるまで帰れないんだよね…。」
と溜め息をつく。

「手伝ってやろうか？」

「えっ！？いいの？…あっ！でも駄目だよ…手伝って貰ったのバレたらまた上原に怒られるし…。」

竜哉の嬉しい申し出に 喜んだ叶だが 上原の言葉を思いだし再び溜め息をつく。

「大丈夫だって。先生なら、さつき帰ってったし…。」

なぬっ！酷くない？

罰とはいえ 生徒に手伝いさせといて自分はさっさと帰っちゃうなんて…

叶は薄情な担任に心の中で毒づいた。

「だから遠慮すんなってっ 藤崎一人じゃ真っ暗になっても終わらねえぞ…。」

「じゃあお願いシマス」

竜哉のありがたい申し出を受け 叶はプリント折りという単調作業に戻った。

二人でプリント折り& a m p ;綴じ作業を始めると 叶が一人でやっていた倍以上の速度で作業は進み20分程で終了した。

まあ単に叶が一人でやっていた時は グチグチ言いながらだらだらと作業していたのだ。あれでは終わるものも終わらなかっただろう…。

「よしっこれで片付いたな…。んじゃ帰りますか」

最後のプリントを綴じ終え 竜哉はうんと伸びをする。

「ほんとありがとね。春日のおかげでやっと帰れるよ。」

…と 言つと叶は大袈裟に拝むふりをしながら竜哉に頭を下げる。

「いいって事よ。どうせ暇… ……じゃねえや 部活の途中だった。やべえな…。先輩怒ってんだろな…」

サアーツと竜哉の顔が青ざめていく。

「ごめんね…。春日。私のせいで…」

「まあ もう終わっちまつてる時間だし、しょうがねえよ…。大丈夫だから気にすんなよ。」

「うん…。ごめん」

「さっさと帰ろうぜ。もう暗いし駅まで送るよ。…ってか…うわっ！俺ジャージのまんまじゃんっ！ 着替えてくっからちよっと待っててな…」

そう言うとき 竜哉は慌てて教室を出て行く。

「なんかいい感じじゃないですか…？」

にこにこしながら カイが現れる。

「そ…そんなじゃないわよっ！」

「そうですか？仲良さそうに見えましたけど…」

「春日はただの友達っ！変な事言わないでよっ」

「昨日はただのクラスメイトって言ってませんでした？」

そう言つとカイはにやにやしながら叶の事を見ってくる。

「っ?! いいヤツだし友達になつてもいいかなつて思っただけよっ」

「誰としゃべつてんだ?」

気がつくと ドアの所に竜哉が立っていた。

「なんでもないから…。気にしないでっ! さあ行こっ」

「おう」

駅までの道… チャリ通学の竜哉は自転車を押しながら叶の隣を歩いていた。

「なあ…。いつまでも藤崎って呼ぶのも他人行儀だし カナって呼んでもいいか?」

「うん。いいよ」

何人かいる他の男友達からもそう呼ばれている為 叶は迷わず返事した。

「じゃあ…春日は うんと 『たっちゃん』なんてどお?」

「お前は南ちゃんかよっ?! しかも俺 野球部だし…」

「何それ…？」

「ん？知らねえのか…。まあ なんでもいいや…好きな様に呼んでくれっ」

他愛もない会話をする二人を空からそつと見ていたカイは この分だと仕事は順調に片付きそうだと喜んでいた。

…と 同時に少し淋しいと思う自分がある事にはまだ気付いていない。

第七話 友達に昇格（後書き）

呼んで頂きありがとうございます。

第八話 日曜日の出来事（前書き）

いつも読んで下さっている方 ありがとうございます。

第八話 日曜日の出来事

「あゝっゝいゝ！」

「そりゃ夏ですからね…」

カイのもっともな返答に暑さも伴いイライラが募る。

「アンタは暑くないの？」

「ええ…実体にならなければ」

今のカイは実体の無い状態。いわば幽霊みたいなモノだ。

夏休みが目前にせまったとある日曜日…。

叶は蒸し風呂の様な自分の部屋で叫んでいた。

今の叶の状態に効果音を付けるとしたら

「うがぁゝ」といった感じだろうな…

…などと考えながらカイは叶を見て少し笑ってしまう。

「ちょっと何がおかしいのよっ？！アンタ仮にも天会の人間でしょ。天候くらいなんとかしなさいよっ！」

暑さで苛つき最高潮な叶は理不尽な事を言っ てカイに当たりだした。

「無理ですって…」

僕の管轄外ですし…。天候管理は『地球部自然課お天気係』の担当なので…。」

「チツ…。使えないヤツ…」

「そこまで言わなくても…」

使えないヤツ呼ばわりされてショックを受けたカイは うなだれながら、床に『の』の字を書きだした。

…こんな風にいじけるヤツほんとに居るんだ…。

変なことにで感心する叶。

こんなに暑い今日に限って 叶の家に一台しかないリビングのエアコンは壊れていた。

母親の話しでは 業者の人が修理にくるのは明後日になってしまうらしい。

仕方なく 自分の部屋の扇風機の前にへばり付いていた叶だが

「うゝ 暑い…。暑過ぎるよぉ…」

日本の夏特有のジメジメした暑さに 叶は汗をかきながらダレていた。

最早、扇風機だけでは役不足な様だ。

「暑い暑いって言うてるから余計暑くなるんですよ…。ほら『心頭滅却すれば火もまた涼し』って言うじゃないですか…。試しに『涼しい』って言うてみたらどうですか…。」

暑さによるイライラをぶつけられて困り気味のカイは 叶に適当な打開策を提案してみる。

「涼しい…」

「…」

「涼しい。涼しい。涼し〜いっ！」

「…ど どうですか？」

「カイの嘘つき…」

「うっ！やっぱ駄目でした？」

じと〜とした目で叶に睨まれカイはたじろぐ。

「暑い〜！…！」

「僕にどうしろって言うんですか…。」

さっきから この様な会話の繰り返しである。

「アイス食べたいなあ」

「…。いきなり何言い出すんです？」

「買って来て」

「ええっ?! 嫌ですって。実体になったら僕まで暑いじゃないですか…。それに他の人に見られたら…」

「だ〜いじょぶだって〜! 今日はお父さんもお母さんも居ないし…近所の人だって親戚のお兄さんかな? くらいにしか思わないよ。」

「…僕に拒否権は？」

「ありません…」

にっこり笑って叶が即答する。

「分かりました。」

そう言つと「ふう〜」

と溜め息をつきながらカイは実体になった。

先程までどこか存在感の薄く透き通っている様に見えていたカイがはっきりと見える様になった。

「うわっ！暑っ！」

実体になり急に暑さを感じたカイが叫ぶ。

「私の気持ちがあったデシヨ？」

「出来れば分かりたくなかったです…」

カイが苦笑いしながら答える。

「わぁ。ちゃんと触れる」

初めてまじまじと実体になったカイを見た叶は 興味深々にカイの体をペタペタ触りだす。

「うわぁ…暑いんですからあんまり触らないで下さいよ」

カイが引きつりながら後ずさる。

「うん…私も暑い…」

「なら尚更やめましょうよ…」

「…うん」

「じゃあアイスよろしくねん あっ！カイのも買っていていいから…」

微妙な空気を打ち破る様に口を開くと叶はカイに500円硬貨を手渡す。

「なんで叶さん自分で行かないんですか？」

「外はもつと暑そうだから…」

「そうですか…」

カイは諦めた様な顔をしてしぶしぶ玄関を出て行った。

「ただいま」

30分後 カイがコンビニの袋をぶら下げて叶の部屋に入ると 叶が扇風機の前で丸まってすやすやと寝息をたてていた。

それを見てくすつと笑うと ベットに在ったタオルケットを叶にそっとかける。

日が傾いてきたせいか 窓から夕方独特の涼しい風が入って来ている。

風で髪の毛のそよぐ叶の寝顔を見つめながら

「寝てると可愛いんですけどね…」

…と呟く。

起きている時の口の達者な叶が頭をよぎりふふつと微笑んだ。

叶さんの人生が幸多きものであります様に…

カイは ふと空を見上げ願う。

カイの胸の中にある手帳に書かれた叶の人生を思い描き 彼女の幸せを願った。

「アイス溶けちゃうな…。」

ポソツと呟くと 冷凍庫にアイスを入れようと部屋のドアを開ける。

すると 物音に反応し叶が目を覚ます。

「…うん？ ああ…カイおかえり〜」

まだ寝ぼけている様な声を出しながら目をこする。

「アイス買って来ましたよ。」

「うん…お疲れ〜。ありがとね…」

叶は軽く礼を言いながら アイスの入った袋を受け取り ゴソゴソ

と漁る。

「…なんでバニラばっかなのっ?!」

「アイスと言えばバニラでしょう?」

「アタシはかき氷が食べたかったのっ!」

「じゃあ行く前に言っておさいよ…」

苦笑いするカイ。

叶と会ってからどうも苦笑する回数が増えたな…
そんな事をふと思う。

「カイ」

「な…なんですか?」

叶の猫なで声に嫌な予感がして口元を引きつらせる。

「かき氷買って来て」

「嫌ですよ…」

「お願い」

叶が甘えた声をだす。

「そんな声だされても…」

「行かないならカイの仕事に協力しないからっ」

ハナから協力するつもりなんて無い叶だったが　ワザとカイが断れない様な事を言う。

「…分かりました。」

ガクツとうなだれるカイ。

更に30分後…。

「イチゴじゃなくてメロンが良かった」

「いい加減にしてください…」

カイの受難の日々はまだまだ続きそうである。

第八話 日曜日の出来事（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
また よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6605a/>

すべては神の仰せのままに

2010年11月14日09時27分発行